

静岡がんセンター 開設15周年記念

静岡がん会議

2017

静岡がんセンター15年のあゆみとこれから

平成30年3月3日(土)

静岡県立静岡がんセンター研究所

主催：静岡県・静岡がんセンター

開催趣旨

静岡がんセンターは2002年に開設して以来15年、「患者さんの視点の重視」を基本理念として最善のがん医療の提供や相談支援体制の充実により、患者さんに優しい病院として日本を代表するがんセンターに育ちました。

本会議は、最先端のがん医療や遺伝子研究、患者家族支援体制などの静岡がんセンターが積み重ねてきた実績や現状、さらには地域の医療・健康産業活性化を目指すファルマバレーセンターの成果や今後について紹介し、新たな時代の「理想のがん医療」につなげていくことを目的に開催します。

静岡県立静岡がんセンター 総長 山口 建



プログラム

静岡がん会議2017

平成30年3月3日(土)
静岡がんセンター研究所しおさいホール

テーマ： 静岡がんセンター15年のあゆみとこれから

10:00 主催者挨拶 ----- 川勝 平太 (静岡県 知事)

10:10 実行委員長挨拶 ----- 山口 建 (静岡県立静岡がんセンター 総長)

第1部：がんを上手になおす～最先端のがん医療～

10:40 講演1 ----- 高齢者のがん医療
玉井 直 (静岡県立静岡がんセンター名誉院長兼麻酔科部長)

11:10 講演2 ----- 大腸外科の低侵襲手術への取り組み
塩見 明生 (静岡県立静岡がんセンター大腸外科部長)

11:40 講演3 ----- 静岡がんセンターの放射線治療、陽子線治療の15年と今後の展望
西村 哲夫 (静岡県立静岡がんセンター副院長兼放射線・陽子線治療センター長)

12:10 質疑応答 (10分)

12:20 昼食 (60分)

13:20 講演4 ----- がん化学療法～分子標的薬・免疫チェックポイント阻害薬～
村上 晴泰 (静岡県立静岡がんセンター化学療法センター部長)

13:50 講演5 ----- 近未来のがんゲノム医療：プロジェクトHOPE
楠原 正俊 (静岡県立静岡がんセンター研究所副所長)

14:20 質疑応答／休憩 (15分)

第2部：患者・家族を徹底支援する

14:35 講演6 ----- 患者家族支援センターの役割～初診時からのがん患者家族支援～
鶴田 清子 (静岡県立静岡がんセンター副院長兼患者家族支援センター長)

15:00 講演7 ----- よろず相談における理想のがん相談
高田 由香 (静岡県立静岡がんセンター疾病管理センター医療ソーシャルワーカー)

15:25 講演8 ----- 支持療法センターの現状～支持療法センターの役割と課題～
中島 和子 (静岡県立静岡がんセンター化学療法・支持療法センター看護師長)

15:50 質疑応答／休憩 (15分)

第3部：成長と進化を継続する

16:05 講演9 ----- 大腸がん抑制を目指したこれからの大腸内視鏡
今井 健一郎 (静岡県立静岡がんセンター内視鏡科医長)

16:25 講演10 ----- 医療現場発のものづくり
植田 勝智 (公益財団法人静岡県産業振興財団ファルマバレーセンター所長)

16:45 質疑応答 (10分)

16:55 閉会挨拶 ----- 山口 建 (静岡県立静岡がんセンター 総長)

第1部：がんを上手になお

講演1

高齢者のがん医療

講 師

玉井 直（静岡県立静岡がんセンター名誉院長兼麻酔科部長）



経歴・研究活動等

1975	京都大学医学部卒業
2000	静岡がんセンター開設準備室技監
2002	静岡がんセンター麻酔科部長
2011	同病院長
2017	同名誉院長 兼 麻酔科部長
2013.5～2017.5	静岡県病院協会会長
	日本麻酔科学会専門医・指導医、日本集中治療医学会専門医

高齢者人口の増加する今後10～15年間、高齢がん患者は確実に増加する。がんは早期に発見できれば手術・放射線治療などで根治は期待できる。一方、再発、遠隔転移があれば抗がん剤治療の対象となるが、現在の抗がん剤ではがんを根治することは困難である。がん治療は術後の機能低下や抗がん剤の副作用を伴うため、身体・精神機能の低下や生活環境の制約を伴う。そのため高齢者での治療選択には、利益と不利益のバランスの考慮と療養支援が重要な課題である。

講演2

大腸外科の低侵襲手術への取り組み

講 師

塩見 明生（静岡県立静岡がんセンター大腸外科部長）



経歴・研究活動等

2000	京都府立医科大学医学部卒業
2004	国立がん研究センター東病院 大腸骨盤外科レジデント・がん専門修練医
2008	静岡県立静岡がんセンター大腸外科副医長
2010	同医長
2017	同部長
	日本外科学会専門医・指導医、日本消化器外科学会専門医・指導医、消化器がん外科治療認定医、日本大腸肛門病学会専門医・指導医、日本内視鏡外科学会評議員・技術認定医、日本ロボット外科学会Robo-Doc Pilot国内A級専門医 ほか

腹腔鏡下手術は、①傷が目立ちにくい ②術後疼痛が少ない ③社会復帰が早いなどの利点があるが、大腸がん治療においての最大の利点は、拡大視効果によって、開腹手術より精緻な手術が可能になる点である。当科では、2011年以降、直腸がんに対するロボット支援下手術（ダヴィンチ手術）を導入した。ロボット支援下手術は、通常の腹腔鏡下手術の利点に加えて、先端に7つの自由度を有したロボット鉗子で操作するため、繊細な手術操作をコンピューター制御下に正確に施行可能になる。このため、がんの根治性や排尿・性機能などの機能温存の向上が期待される。当科ではこれまで全国最多の640例の手術を行い、非常に優れた結果を報告してきた。



す～最先端のがん医療～

講演3 静岡がんセンターの放射線治療、陽子線治療の15年と今後の展望

講 師

西村 哲夫（静岡県立静岡がんセンター副院長兼放射線・陽子線治療センター長）



経歴・研究活動等

1975	名古屋大学医学部卒業
1976	都立駒込病院放射線診療科
1978	浜松医科大学医学部附属病院放射線科
2002	静岡がんセンター放射線治療科部長
2011	同副院長兼務
2015	同放射線・陽子線治療センター長
	放射線治療専門医

2002年の開院当初2台のリニアックと1台の小線源治療装置を用いて各診療科の連携と多職種のチームのもとで診療が始まった。2003年に陽子線治療が開始、その後も機器の整備、新しい治療法の導入に努めてきた。2015年に新治療棟を増設し、放射線治療科と陽子線治療科を統合し、放射線・陽子線治療センターと改称した。2017年の新規治療患者は1,471人で、開院以来では18,550人を数えた。今後も丁寧で質の高い治療を提供したい。

講演4 がん化学療法～分子標的薬・免疫チェックポイント阻害薬～

講 師

村上 晴泰（静岡県立静岡がんセンター化学療法センター部長）



経歴・研究活動等

1996	広島大学医学部卒業
1999	国立がんセンター中央病院内科レジデント
2006	静岡がんセンター呼吸器内科副医長
2010	同医長
2015	同医長 兼 通院治療センター長
2017	同医長 兼 化学療法センター部長
	日本内科学会専門医、日本呼吸器学会専門医・指導医、がん治療認定医専門は肺がん化学療法

分子細胞生物学の進歩によって、がん細胞の増殖・浸潤・転移などに関与する分子が明らかになり、がん細胞に対して選択性・特異性の高い分子を標的とした分子標的薬の開発が盛んに行われている。実際、一部のがんでは、遺伝子解析の結果に基づいた分子標的薬を選択することで従来の治療を大きく上回る効果が期待できるようになっている。がんに対する分子標的薬について、近年注目されている免疫チェックポイント阻害薬などの開発状況も交えて紹介する。

講演5 近未来のがんゲノム医療：プロジェクトHOPE

講 師

楠原 正俊（静岡県立静岡がんセンター研究所副所長）



経歴・研究活動等

1982	慶應義塾大学医学部卒業 同大学病院内科に入局
1986	慶應義塾大学医学部呼吸循環器内科助手
1994-96	ワシントン州立大学医学部留学
2000	防衛医科大学校循環器・老年内科准教授
2008	静岡がんセンター研究所地域資源研究部部長
2013	同副所長
	日本内科学会専門医、日本循環学会専門医

静岡がんセンターでは、近未来のがんゲノム医療として、2014年1月より「プロジェクトHOPE」という臨床研究を進めている。2017年12月末で、約4,000症例で検査を終了し、大腸癌、肺癌、胃癌、乳癌など様々ながん種を解析した。今後、がんゲノム医療をさらに進め、患者さんに最適な治療を提供できるようになることを目指している。

第2部：患者・家族を徹底支援する

講演 6

患者家族支援センターの役割～初診時からのがん患者家族支援～

講 師

鶴田 清子（静岡県立静岡がんセンター副院長兼患者家族支援センター長）



経歴・研究活動等

1977	日本大学医学部附属看護学院卒業
1987	日本大学附属板橋病院、浜松医科大学附属病院勤務
1998	静岡県立こども病院勤務
2002	静岡がんセンター準備室へ異動
2014	静岡がんセンター勤務、医療安全管理監、副看護部長、看護部長 同副院長兼患者家族支援センター長

がん患者のおよそ6割が65歳以上の高齢者で、複雑な状況にある患者が急増している。当センターは2012年に、初診～通院～療養生活まで切れ目がない支援を進める拠点として患者家族支援センターを設置した。本項では初診時からのがん患者・家族支援について紹介する。

講演 7

よろず相談における理想のがん相談

講 師

高田 由香（静岡県立静岡がんセンター疾病管理センター医療ソーシャルワーカー）



経歴・研究活動等

1987	日本女子大学文学部社会福祉学科卒業
1989	農協共済中伊豆リハビリテーションセンター入職
2000	公益社団法人有隣厚生会富士病院入職
2003	静岡がんセンター入職
2014	武藏野大学大学院通信教育部人間学専攻修士取得

よろず相談は、2002年の開院より静岡がんセンターの基本理念である「患者さんと家族を徹底支援すること」を具現化することを目指して病院内の一等地にある。ワンストップの相談窓口として、患者や家族が抱える心理・社会的な問題に幅広く対応し利用されることを願い、ネーミングも考えられた。常に「暮らし」に主眼をおいた相談の基本精神は変わらないものの、社会の変化にともなう複雑な人間関係・治療の進歩・多死社会の看取りなどの相談に対応している。

講演 8

支持療法センターの現状～支持療法センターの役割と課題～

講 師

中島 和子（静岡県立静岡がんセンター化学療法・支持療法センター看護師長）



経歴・研究活動等

1988	国立療養所兵庫中央病院附属看護学校卒業
1991	同病院勤務
2002	千葉県がんセンター勤務
2002	がん化学療法看護認定看護師取得
2015	静岡がんセンター勤務、呼吸器科、血液幹細胞移植科、 がん化学療法看護認定看護師教育課程教員
2016	同通院治療センター看護師長
	同化学療法・支持療法センター看護師長

2016年8月29日に外来処置センターを改め支持療法センターとして、ベッド数16床で運用を開始。外来患者の1日平均1,180人に対して、当センターでは1日平均65人の患者の対応を行っている。利用状況は、予定の注射や点滴（ホルモン注射、骨吸収阻害薬、G-CSF製剤、脱水予防の補液など）、皮下埋め込み型静脉ポートのヘパリンロック、ネプライザー吸入、肝解毒機能の検査・診断のための骨髄生検や穿刺、症状緩和目的の胸腹腔穿刺、在宅療養中の静脉経路の麻薬管理、在宅IVHや経腸栄養の家族指導など多岐にわたる。さらに1日の約30%（約20人）が当日オーダーで、抗がん治療（手術療法・放射線療法・化学療法）の副作用やがんそのものによる苦痛症状によって、支持療法が必要な状況となっている。当センターは、外来通院をしながらメインの抗がん治療が効果的かつ安全に受けられるように、そして、患者・家族が安心して在宅療法が継続できるよう多職種と連携しながら最適な支持療法を提供する役割が求められている。

第3部：成長と進化を継続する

講演 9

大腸がん抑制を目指したこれからの大腸内視鏡

講 師

今井 健一郎（静岡県立静岡がんセンター内視鏡科医長）



経歴・研究活動等

2004	大阪医科大学医学部医学科卒業 京都府立医科大学付属病院初期研修医
2006	近江八幡市立総合医療センター消化器内科後期研修医
2009	静岡がんセンター内視鏡科レジデント
2013	同副医長
2015	同医長

日本消化器内視鏡学会専門医・指導医・学術評議員、
日本消化器病学会専門医・支部評議委員、日本内科学会認定医

大腸内視鏡では無症状の大腸癌を診断したり、前がん病変である、腺腫性ポリープを発見し、摘除することにより、大腸癌の発生および死亡を抑制することが可能とされている(Zauber et al. N Engl J Med 2012)。大腸癌診療において大腸内視鏡のパワーをフル活用すべく、我々はこれまでさまざまな挑戦をしてきた。今回は、大腸癌診療における大腸内視鏡の現況と将来の展望を紹介し、大腸内視鏡技術の近未来像について考察する。

講演 10

医療現場発のものづくり

講 師

植田 勝智（公益財団法人静岡県産業振興財団ファルマバレーセンター 所長）



経歴・研究活動等

1976	静岡県中小企業団体中央会入会 静岡県内の中小企業で組織される協同組合等の設立から運営支援に従事
2005	(公財)静岡県産業振興財団ファルマバレーセンター副所長として出向 創業探索事業、静岡県治験ネットワークの運営及び医療・健康産業分野に進出を図る地域企業の医看工連携に努める。
2012	同センター所長に就任。 現在に至る。

平成29年8月、一般財団法人ふじのくに医療城下町推進機構が設立され、本年4月からファルマバレーセンターは現財団から完全に独立し、医療健康産業振興に特化した組織として再スタートする。

一昨年開所した静岡県医療健康産業研究開発センターを核に、静岡がんセンター等の臨床ニーズと地域企業等の技術とをマッチングさせ、現場で活用される医療機器等の開発を支援し成果を上げてきた。今般の再スタートを機に、マーケットイン型医療機器開発の一層の充実とヒット商品創出を目指している。



Falma Valley Center (Shizuoka Prefecture Medical Health Industry Research Development Center)